

1. 中世英文学研究会の発足— *MED* に寄り添って— 齋藤 勇(同志社大学名誉教授)

MED (Middle English Dictionary) の計画が発表されたのが 1954 年。A の最初の分冊が 1956 年に、1965 年に H I が出ている。なぜ 1965 年に拘るのかというと、この年に中世英文学研究会(以下研究会)が発足したのである。5 月 3 日のことであった。この頃中世の文学やことばに関心を寄せている我々は *MED* のことをしきりに気にしだしていた。こういう辞書を *period dictionary* というのだそうだが、おおよそ *OED* の方針を踏まえていて、これは大変浩瀚な、膨大な辞書になる。早いかもしいないが今のうちに押さえて検証しておきましょう、そうでなければ居心地が悪い。そこで中世英文学研究会の第 2 回例会(於京都大学)でのシンポジウム、『*MED* をめぐって』が計画実行された。1965 年 10 月 17 日のことであった。司会、成瀬正幾、発表者、須藤 淳、水鳥喜喬、大泉昭夫の各氏であった。実質的にはこの第 2 回が研究会の第一歩といってよい。第 1 回は同志社大学で開かれたが、これはいわゆる中世屋さんたちの初御目見えの日、手打ち式の日といってよい。

主に近畿、中京に居を占める方々がいささか興奮気味に一堂に集った。中世を学んでいる人々は、別に肩身が狭い思いはなかったが、英米の現代文学の研究者のような華やかな舞台をあえて忌避して、一人で黙々と勉強していた。ひとりひとりが健気な一匹狼であった。でも、文献や資料情報を定期的に交わせる横の連絡の時と場が欲しい、というむずむずするような思いがあつて、それが叶ったのである。これでなんとなく安心した。東京には中世英文学談話会(以下談話会)というのがあったが、丁度この頃中断していた。頃やよし、という気持もあつた。同志社の齋藤が、かねてご交誼を得ていた大阪市大の吉田新吾先生と相談し、京大の御輿員三先生の実に懇切な介添をうけて、趣意書を作成し、これといった人々に檄をとばしたのである。こうして年に二回の例会ということで回を重ねる毎に聞きつたえた有志も集い、5, 6 年後には 100 名ほどの会員数になった。当時はまだ院生だった人々も、また九州や中国の研究者も追々馳せ参じる。時には、すでに活動を再開していた東京の談話会の面々も研究会に陪席、発表もしていただき、かくして 20 年の星霜を経、全国規模の学会結成の機運醸成とともに、1984 年 11 月 25 日、最終回と同時に 20 周年記念の会として日本中世英語英文学会へと再編成されるのを待つことになる。最終回のシンポジウムのテーマは「中世英語研究の展望と課題」、講演には R. B. Mitchell 博士を迎えて、“The Main Differences between Old English and Modern English (Excluding Pronunciation)” を拝聴する。最終回ということでも特に感傷に浸ることもなかった。全国規模学会への希望が先にひかえていたからである。

ちなみに創立 10 周年には御輿員三氏の記念講演と、『三つの「トロイルスとクレシダ」』というシンポジウムが催されたが、なんといっても第 2 回の『*MED* について』というのが私の感動を呼んだ。情緒的に興奮していたせいもあるが…。成瀬氏が *MED* のプランを紹介し、須藤氏は *Entry form, phrase, meaning, quotation* の吟味にあたられ、水鳥氏は *Stratman – Bradley* の *A Middle English Dictionary* および、*Mayhew – Skeat* の *A Concise Dictionary of Middle English* との比較、大泉氏は *OED* との比較をされた記憶がある。水鳥氏が *MED* の語義解説は *OED* に較

べると情緒に欠けますね、とポツリ漏らされたのをおぼえている。皆々30歳台の若手である。

おもしろいもので同志意識が生まれてくる。仲が良かった。やっと同じ場で、同じ話題に華を咲かせ、励ましあい、批判しあい、会果てると杯を傾けて歓談、ということになる。この一献がまた楽しかった。互いに阿吽の呼吸が合っていた。いい思い出だ。

また *MED* に話が戻るが、研究会が終幕し、全国学会が結成された頃、*R* の項の分冊が次々と出版されている。そして完成出版されたのが2001年。45年ほどかかっている。(ちなみに *OED* の第1巻が出てから完成までに44年ほどかかっている。) 中世英文学研究会が発足して20年、日本中世英語英文学会へと発展し、その学会が20周年を迎えた。あわせて40年という年月は、およそ *MED* の次々の分冊発行に我々は寄り添ってきたという感懐を与えてくれる。依ってもって本望というべきか。

MED の検討で出発した。そして20年。全国学会への解消発展からさらに20年。もういちど *MED* 完成を記念してシンポジウムでも計画されたいかがなものであろうか。1984年には Robert E. Lewis を主幹とする *Plan and Bibliography, Supplement I* も出版されていることだし。それも含めて、初々しく接してきた頃とちがって、長年使い慣れてきた実績も踏まえてこの案、検討する価値があるだろう。

先程、研究会発足時の中核、若手研究者たちは私も含めて皆々30歳台と申しあげた。あれから40年。すると、あの連中はもう樹齢...。あつと、ここで擱筆しよう。

(付記) 中世英文学研究会の全記録(年月日、研究発表、発表者名、題目、シンポジウムのテーマ、パネラーの名、それらの要旨)はすべて佐々部英男氏によって保存され、複写され、『中世英文学研究会の歩み』と題して編集、製本されている。氏は数部を関係各位に贈られた。そのうちの一本は斎藤も贈呈を受け、それを斎藤は同志社大学図書館(現情報センター)に寄贈、登録番号は85.05.20.075、分類930.24、記号C2。ご利用される機会があればどうぞ。[付記:研究会の実記録は追ってホームページに掲載の予定:小史編纂委員会]